



古井由吉
東京物語考



古井由吉東京物語考

東京物語考

一九八四年三月二八日 第一刷発行◎

定価一三〇〇円

著者 古井 由吉

発行者 緑川 亨

発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五番五号 鐵岩波書店

電話 〇三三六四二二
振替 東京 〇二六四〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

古井由吉東京物語考

目次

安易の風……………7

窪溜の栖……………21

楽しき独学……………37

居馴れたところ……………51

生きられない……………65

何という不思議な……………79

心やさしの男たち……………95

無縁の夢……………109

濡れた火宅……………123

幼少の砌の……………139

とりいそぎ略歴……………153

命なりけり……………169

肉体の専制……………185

境を越えて……………201

装幀：菊地信義

安易の風

記憶に間違いがなければ昭和の二十八年か、あるいは九年に、高校生の私は五反田で小津安二郎の「東京物語」を見た。駅に近い、御殿山から品川へ向かう道路に面した映画館である。正面はコンクリート風だが、道の向う岸から見あげると、上は古めかしい瓦の大屋根だった。当時、映画が終ると私はたいい駆けるようにしてその場を去ったものだ。遣る瀬なさをまず振り落すためだったか。まだ運動靴などをはいていた年頃である。で、その日も二階の上映室を出て日盛りの窓に目を細め、階段を早足で降りかけると、途中の踊り場で刑事に呼び止められた。

土曜の正午頃に映画から出て来た学生服姿を怪しまれたわけだ。私の学校はその頃から隔週五日制を取っていた。その旨を話すと刑事はすぐに顔を和らげ、私と同じ年頃の息子でもあるのか、どこかわびしげに大学受験の話始めた。誰も彼も大学へ行くことになって世の中どう変っていくことやら、親は食うや食わずの心配なのに、と歎いた。私も何となく心を惹かれて、馴れぬ立ち話の相手をしばらくしていた。おのずとぼつりぼつりとなる両者の口調に、いましがたの映画の名残りが滴っていたかもしれない。おかしい図である。

同じ東京の小市民とはいいいながら、自分のところよりも一段と小綺麗な暮しだな、と高校生
の私はまずそういう印象を画面から受けた。戦災の痛手をこうも蒙らなかつたら、我家だつて、
苦さもあんなところだったか、とかすかな羨望も覚えた。戦争の打撃によってさらに多くの小
市民家庭が、零落の方向にせよ解放の方向にせよ、出来あがり定着しつつあつた時代だったか
と思う。雑居家族がそろそろ整理され、ひとつの端境期であつた。後の言葉でいう核家族とし
て、簡易にまとまれた家と、なにかの事情でまとまりきれず古い崩壊の傷やら膿やらをまだひ
きずつていた家と、およそふたとおりあつたようだ。「東京物語」中の「東京者」の暮しぶり
は、少年の私の目にはその前者の、むしろ新しい、仕合わせな部類として映つたわけだ。

杉村春子の扮する中年の長女が、母親の葬儀も落着いた頃の或る日、郷里の家で一家揃つて
の食事の最中に、飯を掻きこんでいた箸をいきなり止めて、もどかしく宙をつつくようにしな
がら、ああ、あれあれ、お母さんの、あの帯いただくわ、と高調子に言つた場面が印象に残
つた。十六、七歳の私にとつても、親族の女たちの間で幾度も目撃した光景のような気がして、
まことに得心の行く場面ではあつたが、それでもまた一方で、ああもさばさば行くものか、も
うすこし粘りはしないか、という訝りはあつた。しつとりとした佳作ではあるが、日本映画特
有のスローテンポにはじりじりさせられる、とさる学生新聞の生意氣盛りの匿名氏は評してい
た。洋画のほうではたしか、「陽のあたる場所」が評判を呼んだ頃である。あれこそ重苦しい、
スローテンポではないか、と私はそちらにも心を惹かれていた。もう三十年近く昔になる。

わたくし、現在四十代なかばの世帯主、生まれて四十何年来の東京住人、新開地の旧地番を

中年期から本籍とする男は一体、新しい東京者なのか、古い東京者のなれのはてなのか、それともあんがい、たわいもない反復なのか――。

先人たちの小説の内にさまざまな東京物語をたずねて、おのれの所在を知りたいという欲求が、この文章の始まりである。東京者というのは東京移住者、およびその子供たち、とひとまず範圍を区切る。そうなるに関心のおもむくところはまず、そもその移住の初め、いかに取り着いて、いかに挫折屈託して、やがていかに居着いたかの身上話となり、それもなるべくは古い、あからさまな形がよろしい。という話になればまた私の念頭におのずと浮ぶのが明治の世の、金沢からの移住者徳田秋聲である。この人をこそ、私は東京物語の主なる祖の一人だと考える。近代の作家をつかまえて祖などと呼ぶのは可笑しいような話だが、東京物語なるものがたかだか百年のものなのだからしかたがない。じつに、祖父から孫までの三代の生涯で樂に覆^{おほ}える年月なのだ。

とにかく小説の只中へまっすぐに入りたいと思う。折しも葬式、納棺の場面である。そこでひとつの笑いが棺を取り巻く者たちの間から起る。その笑いの、正体にいささかこだわるいわれはありそうだ。作品は明治四十三年発表の「足迹」、その五十章目にあたる。場面そのものは明治三十四年頃と思われる。所は築地、夜には靈岸島の船の汽笛が聞えるあたり、格子戸造りの小瀟^{こざうばり}洒とした家の内である。

「さあ皆さん打著^{ぶつ}てしまひますよ。」葬儀屋の若いものと世話役の安公とが、大聲に觸立てる

と、衆はぞろぞろと棺の側へ寄つて行つた。

細長い棺の中には、布の茶袋が一杯詰められてあつた。冠物や、草鞋のやうな物が其端の方から見えた。生前に色々の著物を縫つて著せるのが楽しみであつた人形を入れてやらうか遣るまいかと云ふことに就いて、女の連中がまた捫着してゐた。

「入れないさうです。」と、誰やらが大分経つてから聲かけた。衆が笑出した。

「残しておいても何だか氣味がわるいやうですから入れて下さい。」とお庄は言つたが、母親は惜しがつた。

「私が娘の片身に田舎へ連れて歸らしてお貰ひ申しますわね。」と、姑も言出した。安公が凸凹の棺のなかを均しながら、ぐいぐいと壓しつけると、「おい來たよ。」と蓋が旋て直りと卸された。

《衆が笑出した》と、變に印象に残る一行であつた、と文芸時評家の流儀に従えば、それで済みもすることなのだが。

まず、通夜とか葬式の席で人はあんがいに笑う、ちよつとした齟齬をきっかけにとかくだらけたやうな笑いを洩らすものだ、とは一般的に言える。いよいよ納棺の、氣の張りつめた間際に、人形のこと、まだ決まりのつかぬことが出てきた。その家の主婦であつた故人は生前、子のない淋しさを、人形の衣裳を縫うことで慰めてきた。男たちはそんなことに大して神経も

まわらないが女たち、主人の姪にあたる同居人の少女とその母親と、郷里から出てきた故人の母親と、女たちはさすがにそれにこだわる。また悶着、とあるのは、いくらカムキになって議論したというぐらいのところか。周囲の存在をしばし忘れはしたようだ。とにかくそれによって流れはいっとき滞った。儀礼の最中にいきなり妙な間があくのは、姿勢が保ちがなくなつて具合の悪いものだ。大分経ってから、という言葉が笑いの説明とはなっている。入れないそうです、と触れた声には、すこし辟易させられたのを惚けて、頓狂な調子があったのだろう。

ともあれ死者との最後の別れが、生者たちのだらけた笑いに送られるかたちになった。笑ひ出した箇所につづく、女たちの言葉はこの作家に特有の、後から来る説明、その前の悶着の内容を示すものであつて、時間の流れとしては、笑ひ出したからすぐに、棺の中をおしつけて蓋をおろすところへつづく。男たちの顔には、おそらく亭主もふくめて、笑ひの影がまだ残っていたはずだ。これはあまりと言うべきだろうか。

病人は早々に医者から見放されて、それから入院した。身内の者たちもただ死を待つよりほかになかった。そういう事情もはたらいっているのだろう。郷里の母親もすぐに呼び寄せられて、三週間ばかり経っているらしい。「執にしたつて死ぬ病人だもんで、病院に望みはない」、と言ひ放つた四十手前の亭主は細君の入院中にもしばしば外を泊まり歩いて、臨終の時には知人の家で夜つぱき花札をひいて明け方に寝込んだところを呼びつけられた。女たちはいざ葬式の衣裳の仕度^{てんて}に天手古舞^{てんて}いをさせられていた。しかし、いわゆる頹廢の氣とも違ふ。

「良人も彼處は、今年が丁度三年目だでね、どうか巧い工合に失敗らないでやつてくれれば

可いと思つてね……三年目には必然^{きつとしくじ}失敗するのが、是迄のあの人の癖だもんですからね」

故人が生前、お庄母娘^{おむすめ}にそうこぼした。お庄の母親の弟にあたるこの家の主人^{あるじ}は、若くから郷里の村を出て、二度も三度もまごついたのちに、お庄母娘の転がりこんでできた頃には石川島のほうの会社で、いくらか信用ができて株などに手を出していた。町屋風の家の、青々とした畳に新しい算笥なども見えて、茶の間の火鉢の近くの壁に三味線やら月琴やらの掛っている、そんな暮し向きである。甲斐^{はたらき}性はあるようなのだが、勤めにすこし尻が暖まるとすぐに外の手に出す。株のほかにも、鉱山の売買などを勝手にやって、儲けた金で茶屋遊びをする。しかしその羽振りも、細君の言葉から察するにたかだかここ二、三年のことで、その細君の入院する前にはすでに行き詰まり、使い込みで会社を罷めさせられながら堅い手も打たず、いつか投機^{やま}のあたることを心頼みに、情性で遊びつづけている。自身も死病におかされかけていることを知らずにいた。二年あまり後にはやはり手遅れの身を、もう一度上京して盛り返す望みをまだ捨てずに、寄せるあてもない郷里へ運ぶことになる。日清戦争後の景気の下火になったことも、この人物の運命^{かかわ}に関つたようだ。

つまり活力もあり度胸もあり、たぶん勤勉でもあり、あるところまでは力づくでものしあがめるのだが、さてそこから堅く守るすべを知らない。守るべきところで、頼れ^たが出てくる。投機と茶屋遊びに奔^{はし}るわけだが、この人物の場合、遊ぶことは遊ぶがさほど淫するほうでもなさそう、細君との別れ話も起らない。むしろ活力が野放図となり、こらえ性をなくして、一攫千金の欲のほうへつい傾くという病いだろうか。いわゆる頹廢の気とも違ふと先に述べたのは、

このところである。余剰と衰弱から醸し出されるデカダンスではなくて、程^{ほど}をわきまえられぬ活力そのものの病いに見える。

この守るすべをどこか知らぬという、頼れへの傾きは、十六、七のまだまだ健康なお庄の体質にも通じるものである。お庄の十一か十二の歳に、両親と子供六人、お庄の一家は東京へ出てくる。山畑をすこしばかり残して、家屋敷と田とを一切売り払ったその金が、そっくり父親の胴巻きにある。山国の村から汽車のあるところまでは馬車と人力車と、峠越えは徒歩で、五日もかかった。途中の温泉場で父親は三日も四日も逗留して、芸者をあげて騒ぎ出す始末で、上野に着くと妻子を先に人力車で湯島あたりの、同郷で縁つづきの未亡人の経営する下宿屋へやり、自身は駅前から姿を消して翌日まで現われない。

郷里で放蕩した父親には東京で新しい世帯を立てるだけの性根もない。楽な稼ぎをあてこんだ行きあたりばったりの暮しがつづいて、やがて郷里に残した畑も売られ、およそ一年半後にはすっかり行き詰まって、妻子を東京に残したまま田舎へ帰ってしまう。一家は縁を頼って分散する。しばらくして上京した身内の口から、父親が郷里のさる傾きかけた宿屋の寡婦のところへ、口ききのようなかたちで入り込んでいるという話が伝えられる。半年ほどしてもう一度上京して、末の子を押しつけられて郷里へ帰り、それきり東京へはもどらなくなる。

その間にお庄は、一度は父親と関係の怪しげな女のいとなむ、浅草は雷門の手前の横丁にある小間物屋にあずけられたが半年ほどで湯島へ逃げもどり、やがて日本橋の堅い家へ奉公に出されるがそこもひと夏で、だいぶ頼れのまわった朋輩に誘われて、浅草の仲見世寄りの静かな